

## 第Ⅱ部 ケアの現象学

### 《開会の辞》

浜渦 辰二（静岡大学）

皆さんおはようございます。私は、静岡大学の浜渦と申します。今日のシンポジウムは、科学研究費をいただいた共同研究プロジェクト「いのち・からだ・こころをめぐる現代的問題の応用現象学からの貢献の試み」の一環として行われるものですので、本来ですと、そのプロジェクトの代表であります榊原さんが「開会の言葉」を述べるところですが、ご本人が本日最初の基調報告の演者になっておりますので、私が変わって開会の言葉を述べさせていただくことになりました。

このプロジェクトについて、簡単に紹介させていただきます。「第2回応用現象学会議」と称して、昨日と今日、二日間にわたる企画でありまして、昨日は国際会議という形で、外国からお客さんを招いてディスカッションしましたので、この同じ空間にドイツ語と英語が飛び交っておりました。どこかにまだその余韻が残っているかも知れません。

今日二日目は、日本語でのシンポジウムとなっており、「ケアの現象学」と題した第2部の企画であります。「応用現象学」と名打っておりますが、私たちの考え方としては、現象学という理論としてすでに出来上がったものを私たちがもっていて、それを実際の場面に応用しようという、そんな企画では決してありません。むしろ、それぞれの分野で仕事をしておられる方々と対話をする場面を、「応用現象学」と考えております。現象学というのは、早い時期から様々な学問分野、様々な現場で働いている方々と対話を続けてきて来た歴史をもっています。実際、日本で『現象学事典』という本が出ておりますが、それを開いていただきますと、「現象学と何とか」という項目がたくさん並んでおります。今日のテーマと関係するところで言いますと、たとえば「現象学と医学」「現象学と精神医学」「現象学と看護」、そのほかにももちろん、心理学、社会学、文化人類学、言語学など、様々な学問分野と対話を続けてきていることが分かります。私たちとしては、出来上がった理論を応用するというよりは、むしろ、われわれの理論そのものを鍛え上げていくためにも、そういう場面との接点が必要だと考えている次第です。そういう趣旨で、「応用現象学」というタイトルで様々な分野と対話を行っているわけですが、今日はその一環として、看護系の方々との対話ということで、「ケアの現象学」と題した企画になっています。

今日は大変お忙しい中、看護現場でそれぞれに活躍しておられる方々、三人をお招きいたしまして、そういう方々のお話を伺いながら、私たち自身を鍛えたいと考えているような次第です。三人の方々については、それぞれの司会の方から詳しく紹介がありますので、省略させていただきますが、私自身これだけのメンバーにお集まりいただけたことを、大変嬉しく思っております。ということで、今日は、先ほど触れましたように、私たちのプロジェクトの代表でもあります、榊原さんの基調報告から始めて、それから三人の方々のお話をお聞きしたいと考えております。ということで、簡単ではありますが、「開会の言葉」にさせていただきます。